

明日の淡海

Vol. 16

自然と人との共生をめざして

●●● Contents ●●●

- 巻頭言 環境は金にならない? 2
びわこ銀行 頭取 山田 督
- 巻頭特集 琵琶湖一周調査隊からの報告 3
- 私の仕事特集 ヨシを商う 8
琵琶湖ヨシ環境事業協同組合設立15周年に際して
理事長 川嶋 茂久
- 財団活動紹介 本年3月までに行われた主な事業をご紹介 11
- 県外特集 環八郎湖・水の郷創出プロジェクト 12
- 地域の特集 コトナリエ 夏によし、環境に善し、人も好し 16
- 滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより 2006年度 滋賀県地球温暖化防止活動推進センター 18
活動のまとめ

巻頭言

Kan・Tou・Gen

環境は金にならない？

びわこ銀行 頭取 山田 督

学生生活を過ごしたなつかしい場所に35年ぶりに帰ってきて、早や2年近くが経ちました。

私が滋賀県を離れていたこの間の経済動向を振り返りますと、バブルを経験し、東西冷戦の終結を経て、グローバル化が日本経済を劇的に変貌させた、というように整理できそうです。また、この間インターネットの普及など情報革命が世界経済に与えた影響は非常に大きなものでしたが、それと並んで「地球環境の危機」が企業活動を一変させました。

その昔、日本経済がバブルを謳歌していたころ、「環境は金にならない」というのが半ば常識化していました。今も果たしてそうでしょうか。私は「環境と経済の両立」こそ、今世紀の企業が成長するキーワードであると考えています。現代社会において「経済」は極めて重要な要素であるため、永続的に発展するものになければなりません。そのような観点からみると、市場の中で企業は利益を追求し、成長してこそ存在意義があるといえます。しかし、一方では

人間の果てしなく膨張する欲望が招いた地球温暖化をはじめめとする今日の環境破壊の状況があり、さらに心の荒廃を象徴するかのような事件が相次いでいる世相を見ていると、われわれの社会はやがて壁に突き当たるのではないかと強く懸念されます。

先ごろ、アル・ゴア元副大統領の講演をドキュメンタリータッチで追った映画「不都合な真実」が話題を呼びました。日本でもちよつとしたブームになったくらいですから、お膝元の米国ではかなりの反響があったようです。EU諸国は日本と並んで環境意識が高く、従前より多くの企業が環境との共生を模索してきましたが、京都議定書を批准していない米国では、「環境は金にならない」と考える企業が大半を占めていました。しかし、最近では映画の効果もあってか多くの企業がその活動のあり方について自問自答し、環境問題に真剣に取り組み始めています。これからは日・米・欧が環境技術や環境サービスを互いに切磋琢磨しながら開発・普及させることになるでしょう。環境問題

に取り組む企業は、そのこと自体がブランド化し、信頼を受けるはずですが、すでに日本企業は環境技術や環境サービスでは世界をリードしています。その日本の中でも、琵琶湖とともに生き、とりわけ環境意識が高い滋賀県で活動する企業や私たち一人ひとりは、世界に「環境と経済の調和」の必要性を発信できる位置にいるといえるのではないのでしょうか。

当行でも金融商品に環境の視点を積極的に取り入れ、微力ではありますがそれがひいてはお客様の利益につながり、地元の利益、環境の利益につながることを期待しています。とはいっても、まだまだ当行を含め、金融機関は環境問題に対して充分に取り組んでいるとは思いません。

経済活動の目的は、モノを消費することではなく、何らかの効果・効用を生み出すことにあります。あまり肩に力を入れず、少しは遊び心も入れる余裕を持って環境と経済の調和に貢献したいと考えています。

琵琶湖一周 調査隊からの 報告

【調査日時】

琵琶湖一周調査隊は、第1回目は2005年11月13日、第2回目は2006年7月29日を中心に行われました。

【調査地域】

第1回目は、琵琶湖の周辺219地点。第2回目は琵琶湖の周辺と主要流入河川の流域181地点。湖北、湖東、東近江、湖南、大津、甲賀、湖西の7エリアに分け実施しました。

【調査者】

第1回目は151名。第2回目は161名。それぞれ一般県民や、各地の流域協議会などのNPO団体所属員、滋賀県立大学生、地元小学生などです。

【調査項目】

調査は、COD測定などのパックテストを用いた水質調査と、「水は飲めると思いませんか」などの水や水辺に関する知覚調査、生き物調査、アンケートを実施しました。

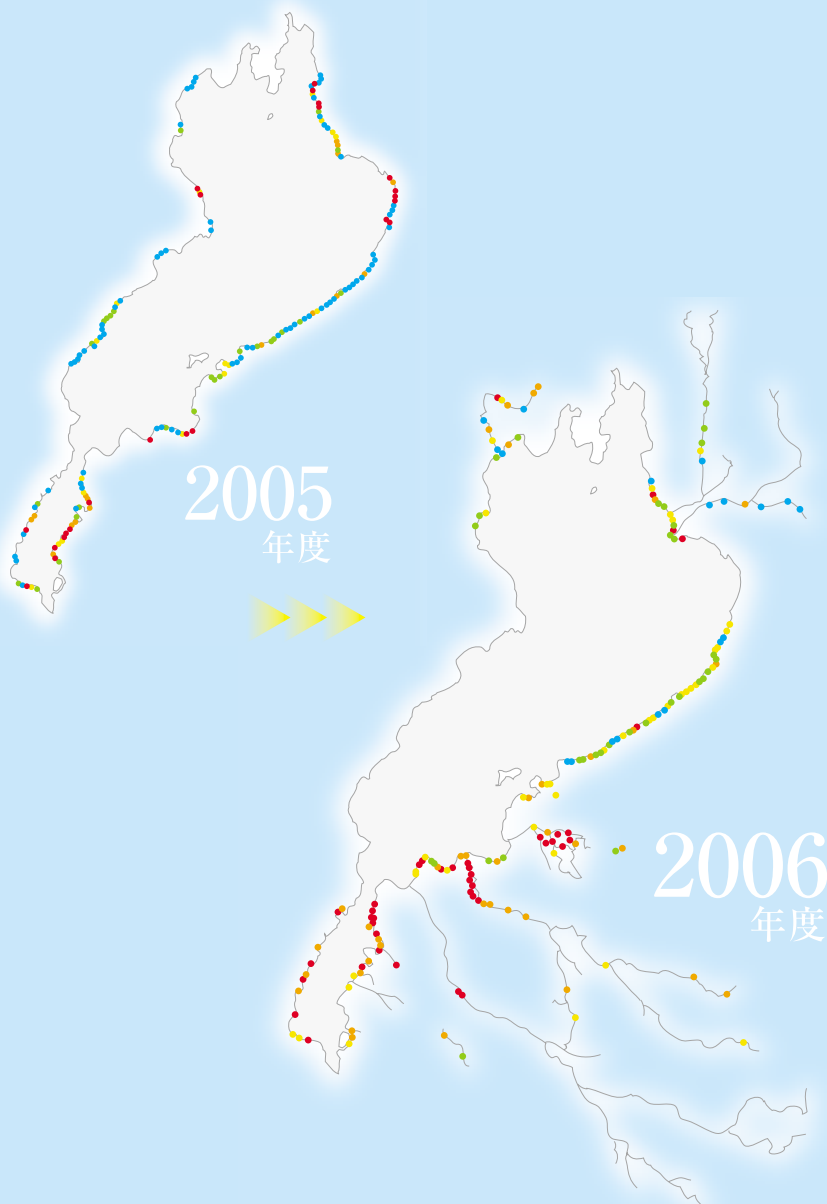
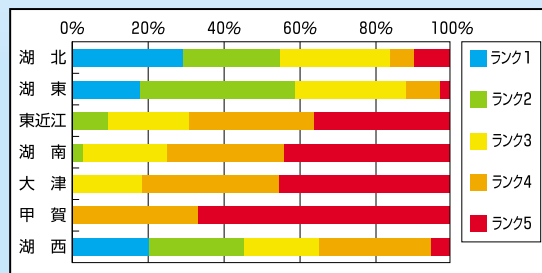
当財団では、2005年度から、「琵琶湖一周調査隊」と銘打って、多くの市民団体や有志の方々と共に琵琶湖岸や流域河川の水質や生き物などの調査を行っています。紙面の関係で全部は無理ですが、調査のうち水質検査等の結果の一部をデータで、また調査の様子を写真で紹介いたします。また、この調査についての意見や、調査結果をいかに地域社会に反映させるかについて考えるため、NPOびわこ豊穰の郷の方に意見を伺います。

第2回 琵琶湖一周調査隊

パックテストによる琵琶湖周辺の水質の状況

COD 水中にどれくらいの有機物が含まれているかを表す水質項目の一つです。家庭や工場からの有機物を含む排水が流れ込んでいる水質が悪い川や湖ほどこのCODの値は高くなります。

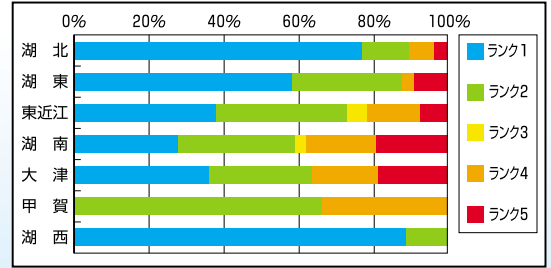
	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5	計
湖北	29.0	25.8	29.0	6.5	9.7	100
湖東	17.6	41.2	29.4	8.8	2.9	100
東近江	0.0	9.5	21.4	33.3	35.7	100
湖南	0.0	3.1	21.9	31.3	43.8	100
大津	0.0	0.0	18.2	36.4	45.5	100
甲賀	0.0	0.0	0.0	33.3	66.7	100
湖西	20.0	25.0	20.0	30.0	5.0	100
排水	2	2~4	4~6	6~8	8以上	





リン酸態リン

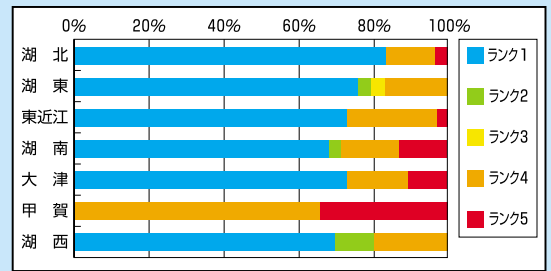
	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5	計
湖 北	77.4	12.9	0.0	6.5	3.2	100
湖 東	58.8	29.4	0.0	2.9	8.8	100
東近江	38.1	35.7	4.8	14.3	7.1	100
湖 南	28.1	3.13	3.1	18.8	18.8	100
大 津	36.4	27.3	0.0	18.2	18.2	100
甲 賀	0.0	66.7	0.0	33.3	0.0	100
湖 西	89.5	10.5	0.0	0.0	0.0	100
標 本	0.05未満	0.05~0.1	0.1~0.15	0.15~0.2	0.2以上	



水中にリン酸塩という形で含まれているリンのことです。プランクトンや藻類の栄養分となって、湖の富栄養化(汚濁)をまねく原因物質の一つです。自然界にもともと存在する量はごくわずかですが、水中に含まれるこのリン酸態リンのほとんどが人間活動の結果によるものです。肥料や家庭や工場からの排水が流れ込んでいる水質が悪い川や湖ほどこのリン酸態リンの濃度は高くなります。

アンモニウム態窒素

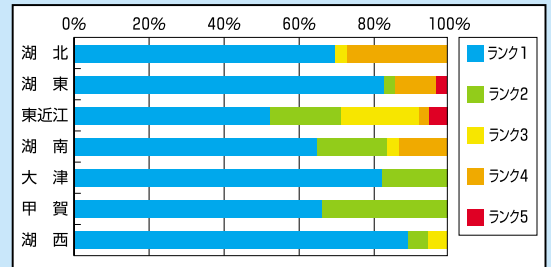
	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5	計
湖 北	83.9	0.0	0.0	12.9	3.2	100
湖 東	76.5	2.9	2.9	17.6	0.0	100
東近江	73.8	0.0	0.0	23.8	2.4	100
湖 南	68.8	3.1	0.0	15.6	12.5	100
大 津	72.7	0.0	0.0	18.2	9.1	100
甲 賀	0.0	0.0	0.0	66.7	33.3	100
湖 西	70.0	10.0	0.0	20.0	0.0	100
標 本	0.25未満	0.25~0.4	0.4~0.5	0.5~0.6	0.6以上	



水中にアンモニウム塩という形で含まれている窒素のことです。下記の亜硝酸態窒素や硝酸態窒素とともに、プランクトンや藻類の栄養分となって、湖の富栄養化(汚濁)をまねく原因物質の一つです。ヒトや家畜のし尿に多く含まれるほか、家庭や工場からの排水中のタンパク質が自然界で分解される途中でもこのアンモニウム態窒素が生まれます。特に、それら汚染源に近いところや、汚れていて水中の酸素が少ない湖や川では、この値が大きくなります。

亜硝酸態窒素

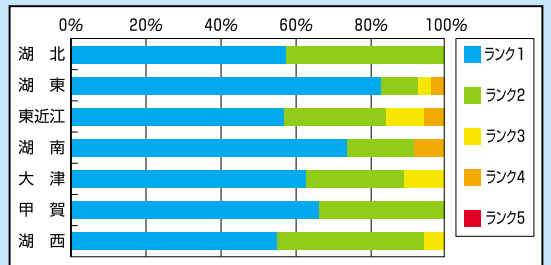
	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5	計
湖 北	71.0	0.0	3.2	25.8	0.0	100
湖 東	82.4	2.9	0.0	11.8	2.9	100
東近江	54.8	16.7	21.4	2.4	4.8	100
湖 南	65.6	18.8	3.1	12.5	0.0	100
大 津	81.8	18.2	0.0	0.0	0.0	100
甲 賀	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0	100
湖 西	90.0	5.0	5.0	0.0	0.0	100
標 本	0.025未満	0.025~0.05	0.05~0.075	0.075~0.1	0.1以上	



水中に亜硝酸塩という形で含まれている窒素のことです。上記のアンモニウム態窒素が自然界で酸化という反応を受けることによって生じますが、不安定な物質で、水中の酸素が多いきれいで湖や川では下記の硝酸態窒素に速やかに変化します。したがって、この亜硝酸態窒素がパックテストで検出されるということは、その地点の近くで、し尿や家庭や工場からの排水が流入していることを示します。

硝酸態窒素

	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5	計
湖 北	58.1	41.9	0.0	0.0	0.0	100
湖 東	82.4	11.8	2.9	2.9	0.0	100
東近江	57.1	26.2	11.9	4.8	0.0	100
湖 南	75.0	18.8	0.0	6.3	0.0	100
大 津	63.6	27.3	9.1	0.0	0.0	100
甲 賀	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0	100
湖 西	55.0	40.0	5.0	0.0	0.0	100
標 本	1未満	1~2	2~3	3~5	5以上	



水中に硝酸塩という形で含まれている窒素のことです。上記のアンモニウム態窒素が自然界で酸化という反応を受けることによって最終的に生じる形の窒素です。湖では、自然による浄化が最も進んだ安定した状態の窒素ですが、肥料や家庭や工場からの排水にも多く含まれていることから、川ではそれらの排水が流入していることを示します。

調査結果の概要(第2回目の結果を中心に)

●パケットテストを用いた水質調査

第1回目が11月に実施されたのに比べて、第2回目は夏場の実施されたためか、2回目の水質のほうが全体的に悪い結果となりました。これは、CODに関しては、夏季の盛んな光合成が湖水中の有機物濃度を上昇させたことが原因だろうと思われる。

また、2回目の調査では、CODに関して、濃度の低い琵琶湖北部の湖北、湖東、湖西ブロックと濃度の高い南部の東近江、湖南、大津、甲賀ブロックに2極化する傾向がみられました。一方、アンモニウム態窒素、硝酸態窒素、亜硝酸態窒素は、いずれも主要流入河川やその河口部に濃度の高いところが集中していました。耕作地から河川に流入する窒素肥料や家庭排水などの集水域での人間活動の影響がこの原因として推察されます。

琵琶湖は、湖自体で汚くなっているわけではありません。河川より悪化の原因となる物質が入ってきているから湖の水質が悪化しているのです。

●水や水辺に関する知覚調査

琵琶湖一周調査隊で特に力を入れたのがこの調査項目です。第1回目では「水の概観」「水のおいしさ」を、第2回目では「水はきれいさ」「泳ぎたいか」「水は飲めるか」などを調査参加者に質問して回答結果がパケットテストの結果とどのような関係にあるかに注目しました。その結果、第2回目では「水はきれいでいい」と「泳ぎたい」と「水は飲める」とパケットテストの間に相関関係がみられました。また、第2回目では、「泳ぎたいか」と「飲めるか」の回答結果がよく似た傾向を示し、パケットテストのCODとリン酸態リン濃度との間に相関関係がみられました。次回の調査では、これら

の相関関係をより詳しくみていきたいと考えています。

このような相関関係が明らかになれば、パケットテスト並に水質を感覚で把握できる「水目利き」が登場し、そういった人たちが増えていくことで、地域住民の水質に対する意識も向上し、たくさんの人たちの目による水質の監視体制ができるかもしれません。



▲水質調査(びわこ豊穰の里)

●生き物調査・アンケート

生き物調査については、多くの植物や野鳥などが観察されました。ただし、参考に配った資料の内容が不十分でしたし、動植物の同定を正確にできる人は多くないことから、限られたデータしか集めることができませんでした。他方、アンケートについては、改めて琵琶湖や水辺の環境について考えさせられた、発見があった、との意見が多く寄せられました。少数ではありますが、特定の場所の水質が前から気になっていたという感想もありました。

※4頁と5頁にデータの一部を示します。

琵琶湖一周調査隊の調査結果については、滋賀県立大学の井手教授にご監修をいただきました。

さらに第2回琵琶湖一周調査隊の水質検査の結果を踏まえ、水質調査等の環境保全活動の経験が豊富なNPOびわこ豊穰の郷の北田理事長と長尾事務局長にお話を伺います。

●聞き手 まず、びわこ豊穰の郷の活動についてお聞かせください。

●長尾 私たちは専門家ではなく、ただ「赤野井湾を昔のようにきれいにしたい」という市民の願いを実践してきたわけです。そのために、最初に自分たちの生活している定点の現状はどうなっているのかを知ろうということで、水質を調べるという1つの切り口で、それからずっと河川の水質の調査をしてきました。

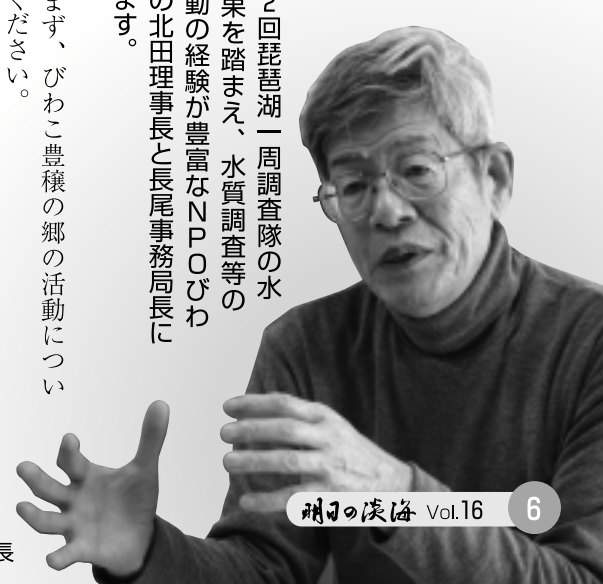
赤野井湾に流入する8河川の上流から下流までをグループに分かれて、また、調査場所についてはグループで話し合い決めていきます。

調査の方法は、パケットテストで窒素とリン、COD、それ以外に水がきれいか、透明か、pH、匂い、泡立ち、五感などで見ていくということです。

1997年から2005年までのデータを見えますと、窒素につきましては、すごくきれいになってきたということがいえますし、リンにつきましてもかなりきれいになってきたと。ただCODは1997年から2005年まで横ばいの状態ということがいえます。

河川の水質について、下水道の普及もあります、住民がかなり意識してきれいにしていったということも事実です。

●聞き手 次に昨年7月の第2回の琵琶湖一周調



査隊のいろんなデータについて、ご意見をいただきたいんですが。

●**長尾** 琵琶湖一周の調査をされたのを見せていただきますと、(4頁、5頁) 同じようにCODは良くなっていない。どちらかといったら汚れているところと、硝酸態窒素につきましても、おおかたランク1のところというところで、かなりきれいなところ。リン酸につきましてもランク1並びにランク2のところまで入ってきているということがいえますし、河川の状態と琵琶湖の周囲の状態がまったく同じことがいえるんじゃないかなということが分かりました。今後河川との連携と意義があると思います。

●**聞き手** 窒素、リンが良くなったのは具体的に何が改善されたんでしょうか。

●**北田** 窒素、リンにつきましては、やっぱり下水道が大きいと思います。ハード面の設備。CODについてはよく分らないんです。専門家が調査されているデータにしても、琵琶湖のCODは決して良くなっていない。最近降雨時の面源(道路や田んぼなど)の調査をされていますので、そのデータが出てきますと、解析も進むでしょうし原因も明らかになるのではと思うんです。

それともう一つ、CODが下がらないという問題は、これは今の生活そのものが限界に来ているといえますか、ライフスタイルを思い切っって変えていかないと駄目だろうと思います。

●**聞き手** ところで市民が水質検査に参加するというのにはどういう意味があるのでしょうか。

●**長尾** いつも議論になるのは、水質のデータを重点に置くのか、皆で水の調査をしている現象を重点に置くのかということですね。水質のデータに重点を置くと、バックテストでいいのかという議論になっていくと思うんです。バック

テストでもいいから、取りあえず川に目を向けようやという人たちを増やしていくことが僕は大事だと思います。

●**聞き手** 10年間やってこられて、データなどが市民の方の目にするものとなっているわけですが、市民の方の行動変容について何かお感じになったことはありますか。

●**長尾** 活動が積み上がってきたと思うんです。具体的には、守山市内70の自治会の中の約20の自治会が何らかの形で川づくり事業を行っています。川に對しての関心が高まらなると川づくりなにかできないかと思うんです。もう一度ホテルを復活させたいという地域もありますし、ハリヨを復活させたいというところもあります。実のなる木を植えて、子どもさんと一緒にそれを採取して、果実酒にしたりしているところもあります。

ハード的なものと同じ時に、ソフト的なものがうまく重なって川がきれいになってきていると思います。結果としてホテルがたくさん飛ぶようになってきたとか、目に見える形で現れてきたということが、また自信につながっていると思うんです。

●**北田** 川を大事にしななければいけないのですが、だんだん川と離れて来ましたね。川と人が身



▲ヨシ学習会



▲守山ほたるパーク&ウォーク

近になる、こういう方向にするということが一番大事かなと思います。わたしらはたとえば「ホテル」というものを通して、川とか水の大切さに結び付けたいと思っています。豊稜の郷といえどそういう目的の方が多くいんですけどね。

●**長尾** 年に1回、川づくりフォーラムを行っています。事前に各自治会にヒアリングに入らせていただいたり、自治会の川づくりを学ばせていただいたりしながら、上流、中流、下流の自治会がどういふことをやってきたのかということ報告していただく場所です。そういう中でお互いの連携が強まっています。

●**聞き手** そういふふうに使おうと非常に面白いですね。

●**北田** 目田川というところでモデル河川をつくろうということ、うちの中でもいろいろやりとりしながら7年ぐらいになってきているんですけど、そういうところにも去年あたりからライオンズクラブとか自治会とか、豊稜が作業をしている上流に桜の木を植えるとか、カキツバタを植えてちよつときれいにしようという、そういう動きにつながってきているんですね。

お話を伺っていると琵琶湖一周調査隊のデータや皆さんの努力を無駄にしないため、地域で水環境に取り組む動きを創る仕組みづくりが大切であると思われました。



ヨシを商う

琵琶湖ヨシ環境事業協同組合設立15周年に際して

滋賀県のヨシを商う業者さんが集まり、琵琶湖ヨシ環境事業協同組合が設立されて、平成18年度で15周年を迎えました。それを記念して同組合の川嶋理事長に昔の西の湖付近のヨシのこと、ヨシ産業についてなど伺います。

■昔の西の湖周辺のヨシ原

●聞き手 昔から近江八幡でヨシを刈り加工してきた業者として、昔の琵琶湖、西の湖、また干拓される前の西の湖とかというのは、どんな様子だったのでしょうか。

●川嶋 取りあえず昭和30年頃やね。その頃は川の水が美しかった。円山(近江八幡市円山町)あたりでも、水道はないから、近くの水をそのまま家の風呂に使ったり飲んだりしてましたんや。われわれも仕事に行った時に一服時にそのまま飲めた。それぐらい美しかった。琵琶湖でも西の湖でも、まわりの田畑に肥料がなかったから、内湖や川のヘド口を全部舟でタマ(タモ)であげて、それから田んぼへ入れたもんです。それが唯一の肥料やった。それで川もきれいになって、それで良かった。

●聞き手 ヨシ原の状態はどうでしたか。

●川嶋 その時分のヨシは、水が美しいから、今と比べたら全然違う。1本のヨシが1年で成長するまでに、だいたい1トンの水を吸い上げるんや。美しい水を吸収したヨシは、皮をむいても、その下なんてシミっつない美しい光沢のヨシでした。これが値は高かった。

昭和30年ごろ、わたしが高卒で月給が6,000円ぐらいでした。そのとき円山のヨシが1束が3,000円もした。いかにヨシが高かったかということや。1ヘクタール年間100万円の収入があって、立派な母屋普請が1軒建ったんや。それだけヨシに価値があったんや。

■琵琶湖のヨシ原

●聞き手 琵琶湖のヨシと西の湖などの内湖のヨシの違いは。

琵琶湖ヨシ環境事業協同組合
理事長 川嶋 茂久



琵琶湖の葭に携わる13業者が集まった組合の理事長。組合ではスタレ、夏の座敷障子、葭の衝立、葭の天然合板の建築材料などのよし製品の製造販売を始め、葭屋根葺きなどの工事もやる。琵琶湖の環境保護や良品の葭を作るため、県の委託も受け、葭の刈り取り、琵琶湖のゴミ等の清掃、水草や雑草の除去や葭の育成にも力を入れている。

●川嶋 琵琶湖のヨシはみんな官有地(県の管理地)にあった。その地先の権利を、昔の県の地方事務所、今の振興局へ申請してお金を払ったら、ヨシを刈らさせてくれた。ところがヨシの値が良かったから地元の人、が先に申請してヨシを刈り取ってしまったんで、後でそれをわれわれが買いに行ったもんですわ。

●聞き手 刈るのは地元の人先なんですか。

●川嶋 そう地元が先に刈りはった。地元の人も潤った。今でも、湖北町の方へ行くとき、地元のおばさんが来て。「わたしら青年時分にヨシ刈りをやった。その時分、日当が250円ぐらいだったのが、ヨシが売れてその4倍ぐらいの収入になった。それだけヨシ業者さんが買ってくれはった」。そういう話をよく聞きましたな。

●聞き手 ただ琵琶湖のヨシだと、琵琶湖の波とか風が当たるんで外側のヨシは曲がってますよね。

●川嶋 そう、ええヨシはあまりなかったわ。ちよっと陸の方の、水につかかってないところがよかったな。そやけども、全部、昔は水のところも陸も一本残らず刈った。あの時分は琵琶湖中ヨシが残ってることはなかったね。琵琶湖では足らんようになって、農業用のため池がたくさんあったやろう。そこに生えてたヨシも、あまりよくないヨシだったけども、方々のため池に出かけ手に入れるために入札した。

●聞き手 入札して、落札したヨシ地は原則自分たちで刈るのですか。

●川嶋 落札したら、刈らせてくれたっていう地元の刈り子さんがいれることもあるんや。

その時は、地元の刈り子さんに刈ってもらい、それを買取る。地元も潤う。

ヨシの品質

●聞き手 現在、西の湖には約100ヘクタールのヨシ原があるといわれていますが、干

拓前の大中の湖にも多くのヨシ原がありましたか。

●川嶋 大中の湖にはそんなにはなかった。白王町(近江八幡市)や能登川に若干あった。現在でも、西の湖のヨシ地はだいたい80パーセントぐらいは私有地。地主は様々で、お寺、個人、でも多いのはやっぱり個人の私有地や。一番多かったのは、円山の西川嘉右衛門さんで、昔17町歩(ヘクタール)ぐらい、それから円山の西村仁助さんが8町歩、円山の西川六左衛門さんのところが8町歩、それが御三家。

●聞き手 西の湖でも場所によっていろいろな品質があったのでしょうか。

●川嶋 一番値が高かったのは、やっぱり西川嘉右衛門さんこのヨシやったね。今も大阪の芦原(大阪市浪速区)というところにスタレ屋さんがたくさんあります。そこへスタレ用のものや夏障子用のものも全部そこへ送ってはった。

また、安土のヨシは、ちよっと赤銅色やっただね。円山のものは、きれいな黄色、鬱金(ウコン)、シウガ科に属する亜熱帯原産の多年草、食用、染料に使用される)色やっただね。というのは、皮をむいて衝立に使った時、ヨシの節の皮があった部分の黄色と皮がなかった部分の赤色のコントラストになったところが長年変わらないことが値打ちちゃったわけやね。

●聞き手 ヨシの茎は日光に当たったら、赤くなるんですか。

●川嶋 赤くなる。よそのヨシでも同じ

めは似てるんやけど、2年3年してくると、どうしても違うねん。やっぱり悪いこのヨシはむいたところがすぐ赤くなる。それで西川嘉右衛門さんところのヨシやったら、そりゃもう色がきれいに皮をむいてるとこは真っ白やわ。



▲葎簾を作る理事長(昭和40年代)

ヨシ原と魚(ヨシ巻き漁)

●聞き手 ヨシ地の入札の話を詳しく。

●川嶋 入札はだいたい8月の末頃でしたね。漁師さんも仲間に入ってきましたね。

●聞き手 その頃入札だと、ヨシが台風で駄目になっても、それは買わないとダメなんでしょうね。

●川嶋 もちろん。

●聞き手 なぜ漁師さんがヨシ地を買われたのですか。

●川嶋 ものすごい数の魚がヨシ地におった。ヨシ巻き漁をやったんや。ヨシ地は、だいたい水深マイナス60センチごろまではヨシが生えるわな。それより深くなったら、もうヨシは生えない。そこから辺からヨシ地をヨシズなどで囲むわけです。

●聞き手 中では魚がバチャバチャはねてますね。

●川嶋 スダレで囲んで、魚が外へ逃げられんようにしてから、中でヨシを刈るんや。刈った順番にスダレを内側にすぼめてくる。そうすると魚はダツダツと陸地へ上がる。そこを一網打尽で取るんや。

●聞き手 その漁は、いつから開始だったんですか。

●川嶋 12月から開始し、後何回もあった。魚があまりすばしっこなくて、つかまえやすい時、つまり冬の時にしたわけやね。みんな魚が寝とるから、それを竹で押すと、入ってきた。その時分は誰でもつかめたけど。当時は。その漁だけでも大したもんやった。

ヨシ組合の創立

●聞き手 そういったヨシ地の刈取やヨシ製品を作っていたヨシ業者さんたちが、琵琶湖ヨシ環境事業協同組合を設立されたわけですが。

●川嶋 平成4年に設立しました。ちょうど昭和47年に中国の国交回復がなされ、それから昭和50年ごろから中国のヨシがどんどん入ってきました。そうすると琵琶湖のヨシを一本残らずわれわれが刈っていたのに、中国

のヨシと比べて値段が合わないので琵琶湖のヨシも放置せなしようがなかったね。また昭和52年に琵琶湖に赤潮が発生し、水質の悪化が目立ってきた。いずれにせよそれ以降は琵琶湖のヨシは誰も手をつけんようになってきたんや。

その後、組合設立時に、琵琶湖の水質をヨシが浄化しているという話が出た。琵琶湖のせつかく浄化したヨシをそのまま放っておくと立ち枯れして、またそれが元の木阿弥になるから、刈らないかん。刈って、外へ出さないかんというのをいわれて、それで組合として琵琶湖のヨシの刈取の仕事を県からいただきました。

●聞き手 組合員は何人なんですか。

●川嶋 設立時に県下には、大小含めて60名はヨシ業者はいたんですが、組合ははじめは15名でスタートしました。組合といっても、みんな海とも山とも分からんし、高齢化していたので加入者は思ったより少なかったですね。

ヨシ産業の未来

●聞き手 せつかく組合を設立したわけですが、後継者のことは。

●川嶋 そつやな。一番の問題は後継者。いずれは交代時期が来るんで、すい分、後継者を探してますけど、今のところなかなか手を上げてくれる人がいないから、ちよっと困ってます。しかしヨシズの需要はと云いますと、関西では昔の10倍ぐらいになっているのです。ただし、ほとんどが中国物です。その

中で、京都の祇園とかの町屋の人は、琵琶湖自体が汚れて、ええ品物は取れへんとわかっていても、やっぱり昔からそうやからといって琵琶湖のヨシのヨシズを買ってくれはるんです。

かつては、滋賀県産のヨシ製品の売上は年間15億ほどといわれてたけど。今は年商2億くらいかな。さらにそのうち、スダレだけだと、年商3,000万円ぐらいでしょう。後は、ヨシ屋根葺きの売上だと思っね。なんにしても難しいわ。ただ我々の代だけでも、なんとか滋賀県のヨシ産業を維持していきたいね。



▲ヨシ組合の作品

財団活動紹介

平成18年度も当財団では、琵琶湖の環境保全や温暖化対策を中心に様々な事業を実施しました。
本年3月までに行われた主な事業をご紹介します。

12月 環境ボランティア・NPO育成事業

ヨシ刈りボランティアの育成を目的に、滋賀県、高島市と共催で、12月10日に「ヨシ刈りとヨシ笛を楽しもう」を実施いたしました。140名もの方々が参加され、午前中ヨシ刈りをし、午後にはヨシ笛の演奏を聞いたり、ヨシ笛の制作を行いました。



活動団体助成・後援事業

びわこ銀行からの寄付金を基に、地域における環境保全活動や自然保護に取り組んでいる16団体に対して助成を行いました。また、環境関係の7事業に対して後援を行いました。

1月



南湖水草刈取事業

琵琶湖南湖の水草の異常発生と湖流を円滑に流すために、漁船のマンガワによる刈取りを実施しました。



漂砂止め工

ヨシ群落造成事業

失われたヨシ群落を取り戻すために、琵琶湖北地方に自然再生を促す漂砂止め工および消波提工を施工しました。

7~2月 外来魚回収事業

「琵琶湖ルール」による外来魚のリリース防止を図るため、釣人等の協力により、ひろめよう券と交換で、琵琶湖から約21.4トンの外来魚を回収しました。また新たに河川から約1.2トンの外来魚を回収しました。



ひろめよう券

事業所対抗「省エネ・レース」事業

滋賀県下70の事業所が参加し、電気・ガス・水道各使用量の削減割合をレース形式で競争しました。70事業所中、63事業所で削減され、CO₂に換算すると約66トンが削減されました。（平成18年末現在）

お知らせ

株式会社びわこ銀行様より、滋賀の環境活動をしている市民団体への助成や地球温暖化防止対策などに役立ててほしいと、寄付金を贈呈していただきました。

県外環境取組事例

環八郎湖・水の郷 創出プロジェクト

かつては、日本第2の湖であった秋田県八郎湖。昭和30年代より国家プロジェクトとして干拓が開始され、広さ約22,000ヘクタールの内、約16,000ヘクタールという大農地が完成しました。この干拓地が「大潟村」となって多くの入植者を受け入れ、日本有数の大規模農業を営んでいます。「あきたこまち」など有力なブランド米を有し、経営的にも全国の先端を進んでいるといわれています。ところが、干拓地のまわりの八郎湖の水質が悪化しはじめたのです。こういった環境を改善し、かつての活性化を図る目的で、「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」という事業が開始されました。この事業を立ち上げたプロジェクトチームの中心である秋田県秋田地域振興局地域企画課の皆さんにこの事業について伺いました。



● 八郎瀨から八郎湖へ

● 聞き手 まず、こういった事業が行われた背景・経緯をお聞かせください。

● 話し手 教科書等でご存じだと思いますが、八郎瀨、現在は八郎湖といいますが、干拓が昭和30年代から始まり、41年に全面干陸となりました。

しかし環境の面はというと、昭和53年にはもうアオコが発生していました。秋田県では、昭和55年の「八郎湖水質汚濁機構解明調査」以来、20年以上にわたって八郎湖の水質改善に取り組んできましたが、残念ながら有効な対策を見いだせていませんでした。一方、大瀧村へ入植した人達は環境保全型農業というものに早くから取り組んできました。これは、有機栽培を始め、農薬の空中散布の全廃、無・減農薬や無・化学肥料栽培といったものです。大瀧村の農業は、八郎湖の水を利用しながら行われていて、利用された水は、周辺の水路を経由して、また八郎湖に戻されます。つまり、水を循環させながら利用しているのです。八郎湖の水質を改善していくためには、大瀧村だけではなく、流入河川を含む流域一体的な取り組みが必要なのですが、その流入河川を持っている周辺市町村と大瀧村とは様々な利害が対立していて、なかなか良い関係が築けない状況にありました。

そこで、この大瀧村と周辺を結び付けよう、橋渡ししようということが始めたのが、平成16年1月に開催した「環八郎湖・流域の未来シンポジウム」です。1月24日。そのときに、振興局が「環八郎湖」ということを唱えました。これは、八郎湖と地域をかなり乖離する構図ではなくて、湖と周辺を一体的にとらえようという考え方ですね。

さらに次の年にも実施したところ、両方とも約

500人も人が集まったものですから、いかに多くの人が八郎湖の水質問題に関心を持っているかが確認できた訳です。シンポジウムに至る過程で、特に地域のいろんな課題が分かかってきました。取りあえず1年目を普及啓発段階と考え、小さいフォーラムを数多くこなしていくことをやって、次の年の平成17年から活動の立ち上げに入ってきました。

● 聞き手 どうして初回に住民の方が500人も集まったんでしょう。動員されたんですか。

● 話し手 動員は全然していません。参加者は、大瀧村の方と周辺市町村の方が中心ですね。中心というかほとんど、9割9分そうじゃないですかね。秋田市の方はほとんどいない。

● 聞き手 農民とか、漁民とか、そういう方が多かったのですか。

● 話し手 そうです。大瀧村の入植者の農家は500戸ぐらいあり、また八郎湖で内水面漁業をやっている漁師さんは250戸ほどあります。それから周辺市町村の住民の方々ですね。

● 八郎湖周辺住民の問題意識

● 聞き手 「環境」という地味なことでも、一般の方は支持されたのですか。

● 話し手 地元の市町村長や住民からは、機会ある毎に八郎湖の水質問題に対する対応を強く要望されてきましたし、そのような人達からの要望が、予想を上回るシンポジウムへの参加という形で現れたのかと思います。

● 聞き手 それは団体に対する補助金、助成があったからではないですか。

● 話し手 確かに助成はありましたが、材料費な

どの実費的な支援のみで、儲かるものではないです。この助成で事業をしても団体側の持ち出しは結構多いかもしれません。ただ、いずれは公共事業などに持っていければ良いと思っていますが。

● 聞き手 今まで、この地域で一般市民を巻き込んだ事業はあったのですか。

● 話し手 住民自身が排水の発生抑制や改善に責任を持って、行政や企業と協働で取り組むといった「住民参加」という視点からは初めてではないでしょうか。環境保全活動や自然再生というのは、本来住民が入らないと地域的な広がりを持ち得ないと思います。

● 聞き手 参加者の主体は年配の方が多いのですか。

● 話し手 そうです、あとは学生。それと漁業者からは、なかなか協力が得られにくかったですね。漁業者側は、八郎湖の水をきれいにして水産資源を取り戻そうと、農水省からの委託で県が管理している、防潮水門(日本海への水門にあたる)を開けることを主張していた訳です。「防潮水門を開けて、海水の導入を！」と。それが度重なる話し合いを通じて、徐々に振興局が進めるプロジェクトの趣旨に一定の理解を示してもらえるようになりました。

● 聞き手 それは何々連合会や協議会じゃなくて、個々の団体や人たち。

● 話し手 それぐらいの骨を折らなければ来てくれないですね。さらに本場のキーパーソンというのは誰なのか。町内会長がその人かということ、そうとも限らないので、それを見極めていく必要がありますね。

● 聞き手 でも、八郎湖に日本海の海水を入れよ

うとする漁業者と、八郎湖に海水が入ると農業に支障がある大潟村の農業者は、対立するのではないですか。

● 話し手 やはり利害が絡みます。平成16年に開催したフォーラムでは、大潟村土地改良区の理事長と内水面漁協の理事長をパネリストとして依頼しました。周囲からは、なぜ利害関係者を組み合わせて入れたのか、などと言われましたが、八郎湖の水質が悪くなって一番困っているのは大潟村の人たちであり、また、内水面漁業の人たちで、立場も目的も違うが、両者が実は一番困っている。だから意味があった訳です。

● 聞き手 周辺地域住民の方々の、八郎湖、水環境を愛する気持ちはもともとどうなのでしょう。

● 話し手 おそらく忘れていたのではないでしょうが。ただ、今八郎湖の環境が悪化して自分たちの生活にも影響が出てくると、かつて遊んだような、暮らしたとにあった八郎湖が「こういう状況でいいのか」という気持ちはどこかにあったのだと思います。干拓で八郎湖はあまりにも変わりましたから。湖の真ん中に干拓地が出来たというのは、琵琶湖とも霞ヶ浦とも全然違う変わりようだと思いますね。

● 秋田地域振興局のプロジェクトチーム

● 聞き手 「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」は秋田県の本庁事業ではなく、秋田地域振興局の事業なのですね。

● 話し手 平成15年に出先機関が統合・強化され、地域の総合的な行政機関として地域振興局が設置されました。従来は、県本庁の各部に出先機関が直属していたのですが、地域を起点とした地域づ

くりや身近で頼りがいのある行政の展開といった総合行政推進の観点から、福祉、農林、建設などといった出先機関は、すべて地域振興局長の下に統括される仕組みになりました。八郎湖の水質悪化の背景には、八郎湖干拓事業による構造的な要因に加えて、広大で複雑な汚濁機構があります。そういった意味で、八郎湖をめぐる問題に対しては、地域振興局が体制的な強みを活かして、部署横断的なプロジェクトチームで取り組んでいくべきだと考えた訳です。

● 聞き手 ただ八郎湖は国家的な事業で巨大な農地を産み出したわけでしょう。そういった流れに逆らう可能性もある八郎湖の環境保全の事業を地域振興局のプロジェクトチームで発案したとしても、県本庁の方々に反対はされなかったのでしょうか。

● 話し手 県本庁などから様々な意見があったのは事実です。しかし、これは何か新しいことをやっている証拠だといひ方に解釈しました。この事業で最初良かったのは、シンポジウムとかフォーラムを開く度に多くの人が集まって来てくれたことです。

● 聞き手 プロジェクトの進め方などはどのようにしているのですか。

● 話し手 プロジェクトチームについては、内部の議論で、お互いなかなか厳しい意見を言い合いますが、基本的にどこういうプロジェクトをやるか、どこういう活動をやるかは、分野ごとに役割分担をして、その人に任せる仕組みにしています。「人材育成」というとちょっと口幅つたい言い方になります。そういった事もやっていきたいと思いましたがね。地域振興局の地域企画課に行けば、建

設分野の人間であっても、農林分野の人間であっても、みんな集まってわいわいがやがや議論している、そういう雰囲気です。それから、企画分野にいても、このプロジェクトに入れば、自分が企画をして、それを実現できる。そういった経験も職員には大事なことだと思いますね。

● 事業の流れ

● 聞き手 次は各年度の具体的な内容をお聞きます。

● 話し手 16年度は普及啓発段階として、シンポジウムなり、フォーラムを計6回開催しました。そして17年度は、活動立ち上げ段階と位置付けまして、「八郎湖の自然再生」をテーマに、「湖岸植生の再生」や「外来魚の駆除対策」といった事業に小学校や各種団体、企業などと協働で取り組みました。さらに併行して、フォーラムを3回開催しています。また、人材育成ということで、霞ヶ浦の自然再生に向け取り組まれているNPO法人から講師を迎えて、小学校の総合学習の場を活用した出前授業を16年度から開催しています。

17年度は、8校、延べ520名の児童に受講いただきました。

18年度からは、フォーラムを年一回に縮小しまして、普及啓発から具体的な活動に切り替えました。先ほど言った湖岸植生の再生や外来魚の駆除活動に加えまして、八郎湖の水源地保全を目的に、間伐や除伐、枝打ちといった森林の手入れ作業を実施した訳です。手入れ作業で得た間伐材は、湖岸植生を再生するための波消し施設にリサイクルしています。また、先ほどの出前授業を通じて、八



水草植え付け会



子ども版フォーラム



出前授業の様子



大久保小ピオトープ

郎湖産の水草を育成するための「ピオトープ」を、流域の小学校単位で造っていく取り組みにも着手していき、小学校では、ピオトープ内の水草や水質、生きものの変化の様子を総合学習の時間を活用して学習しています。18年度の湖岸再生事業の際に植え付けした水草の一部は、小学校の児童が八郎湖の再生を願って、校内のピオトープで大切に育ててくれたものです。

● **聞き手** 17年度から実施している湖岸再生事業とは。

● **話し手** コンクリート護岸の岸边に、水草の群落をつくって八郎湖の原風景を再現し、水質浄化も進めようというものです。八郎湖の沖合に幅30mの波消し施設(粗朶)そだ消波堤と呼んでいます)を2カ所造成して、その内側に昔八郎湖にあったヨシやマコモ、あとアサザといった水草を地域住民の手で植え付けしています。開始したのが17年度ですね。

● **聞き手** それは、コンクリート護岸を潰してですか。

● **話し手** 護岸は直接的に潰していいのですが、護岸に擦りつけるような形で水草の植え付けに適した浅瀬を造るといったものです。

● **聞き手** 今後の展開はどういう形を考えていますか。

● **話し手** 平成20年に当県で全国植樹祭が開催されます。全国植樹祭は、国土緑化運動の中核行事として、毎年全国各地で開催されている行事ですが、19年度以降の活動というのは、この植樹祭の開催に向けて、水源地となる上流部の森林整備といったものを大々的にやって、水源の森から湖まで、水循環にそった一連の自然再生地区を形作っていきたいですね。あと、小学校への出前授業も平成18年は、2,000名ぐらいまで出前授業を受講した児童が増えたんですね。それと運動する形で、司会進行から活動発表、意見交換にいたるすべてを小学校の児童が担当する「子ども版フォーラム」も開催しています。こちらも参画校、活動の幅を広げていきたいと思っています。

プロジェクトで目指しているのは、八郎湖の諸

問題の解決に向け、地域の様々な主体が連携して、地域の主体的で自立的な活動を継続できる環境を整えることにあります。そのための組織化というのが一番迷っているところです。名簿に活動団体を並べた1つの協議会というのではなく、それぞれが直接的には繋がらなくても、小さい輪で緩やかに繋がっていて、すべて八郎湖のために機能していくようなものを組み立てていかなければならないと思っています。それが今後の一番の課題ですね。

● **聞き手** 「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」16年から始まって18年になりました。県本庁の動向などはどう変わってきたのでしょうか。

● **話し手** 平成18度に入って、県の生活環境文化部に「八郎湖環境対策室」が創設されました。現在、この対策室が中心となって、八郎湖の水質改善に向けた具体的な対策の検討や指定湖沼に向けた手続などを進めているところです。地域振興局としては、八郎湖の自然再生に関する普及啓発活動や地域との協働事業といった草の根的な実践を通じて、地域の自発的な活動の誘発や持続可能なシステムづくりに力を入れていきたいと考えていますし、今後進められる抜本的な対策の実施に向けた地域の受け入れ環境の整備にも一役を担っていければと思っています。

湖というのは、人々の飲み水や産業用水としてなど、多くの恩恵を与えますが、八郎湖は、中とそのまわりの地域住民の活動の源ともなっているようです。



コトナリエ

夏によし、環境に善し、人も好し

皆さんは、東近江市で夏行われている「コトナリエ」というイベントをご存じですか。旧湖東町で企画され、10万人を超える方々が訪れます。どうして旧町の人口(約9300人)以上の人を集めるイベントが生まれたか。どうして環境にやさしいイベントに変わっていったか。興味ありませんか。「コトナリエ」について東近江市湖東支所地域振興課にインタビューしました。

● **聞き手** そもそも「コトナリエ」というイベントが始まった経緯についてご説明ください。

● **地域振興課** もともと旧湖東町時代に、湖東商工会の青年部が毎年、8月の第1週目の土曜日に夏祭りを開催してきました。

しかし、合併で湖東町が東近江市になることに、当時の青年部長が、「これまでの夏祭りでは、どこでもやってる夏祭りで目立たない。湖東町最後の夏祭りに何か目立つイベントができないだろうか」と考えました。

そこで平成16年の合併前の夏祭りに「夏のイルミネーション」を点灯することにしました。それが「コトナリエ」の始まりです。

● **聞き手** 場所はどこですか。

● **地域振興課** 田園風景が広がる湖東地区には、10ヘクタールの広大な、都市公園「ひばり公園」があります。

その公園は、大変落ち着いた雰囲気、造形物も適度に存在していますので、それを上手に利用できないかということが始まりました。

● **聞き手** 初年度は何人ぐらい来られたのですか。

● **地域振興課** 初めての年は、1万5,000人ぐらいの来場者だったと思います。何日間か点灯をしていましたが、まだまだ認知度が低かったので、来場者は、少なかったです。

● **聞き手** 実行主体は。

● **地域振興課** 「コトナリエサマーフェスタ実行委員会」です。これは湖東商工会青年部が実行委員長となり、青年部員が中心となっているのですが、合併の時に、東近江市もこれから合併していくにあたって行政主体のまちづくりじゃなくて、「市民と行政が協働で進めるまちづくり」をしよう

うということ、「まちづくり協議会」というものを各旧の市町村単位につくられました。

そのまちづくり協議会と、商工会青年部が連携しながら、実行委員会を組織しています。

● **聞き手** イルミネーションの電球は、はじめはどのぐらい付けられたのですか。

● **地域振興課** 最初はイルミネーション20万球を購入しました。

初めての企画でしたので、取付の段取りも分からず、人手は無い、道具も無い、そんな状態で半分の電球しか取り付けることができませんでした。

デザインも、「広い敷地にどのように電球を付けたらいいのか?取りあえず、付けられるようにやってみよう」というものでした。

初年度は、「夏にこんな、イルミネーションって珍しいなあ。」って思われてました。お盆の時期も重ったので、初年度にしては、来場者があつたと思います。

● **聞き手** コトナリエは平成17年度にお客さんが10万人ぐらい来られ、「ブレイク」したように見受けられるのですが。これは電球の数を増やしたからですか。

● **地域振興課** そうですね。初年度に20万球購入しておきながら、半分しか取り付け出来ませんでしたので、昨年の反省を踏まえ、「行き当たりばつたりの取り付けではなく、デザインをしっかり決めて、電球20万球は全て飾り付けてみよう。」という意見が出ました。しかも20万球全て取り付けるには、それだけの人手ボランティアを集めてこななければいけませんでした。

そこで、湖東商工会とまちづくり協議会が連



ディーゼルエンジン



廃食油を利用



携し、友だちが友だちを呼んでいくような形でボランティアをお願いし、17年度はなんと20万球全てを取り付けることができました。

●聞き手 大変でしたでしょうね。

●地域振興課 そうですね。17年度はまちづくり協議会との連携もうまくいって、ボランティアの方々にたくさん来ていただきました。

それと16年度終了後に「コトナリエをやっている方々にたくさん来ていただきました。それと17年度は、あまり宣伝もしなかったのですが、口コミで予想もつかないような10万人という人が来場されました。

●聞き手 それを受けて18年度は「環境に配慮」ということを考えられたと聞きました。

●地域振興課 17年度に10万の来場者があったのですが、来場者の中から、「すごくきれいやね、けれどこの電気代もつたいないね」という声が出て、「ああ、これは電気代、もつたいないことをしてらんや」と皆が感じたのです。

もともと東近江市では菜の花エコプロジェクトを進める先進地でもあります。家庭から出る廃食油をBDF(廃食油などから製造されるディーゼルエンジンなどを動かす軽油に代わる燃料)に変える施設も持っていますので、そこで電気をBDFを使った発電機で賄えないかというような発想が出てきました。その希望をヤンマー株式会社さんが協力下さり、18年度は全ての電気を廃食油を利用したBDFで賄うことができました。来場者も約13万人となりました。

●聞き手 準備とか非常に大変だと思いませんか。

●地域振興課 コトナリエの準備ってというのは、何よりも大変暑い時期、7月から1カ月間、土日全部を利用して、たくさんボランティアの皆さんで作業します。

今現在、25万ぐらいの電球がありますが、去年も県立大学の学生さんと一緒にデザインを協議し

ながら取り付け作業を行いました。デザインは、毎年変わりますので、その飾りつけとなると、当然今までと同じように7月の土日をすべて利用することにになります。

今年も3月末から県立大学の学生の方々と一緒にデザインから取り付けの段取りを進める予定をしています。

●聞き手 市民と行政が実行委員会の中で共に仕事をされる上での問題は。

●地域振興課 コトナリエは、商工会青年部が実行委員会の中心となっていて行なっています。開催当初の部長は、非常に熱い思いを持っていらつしやる、リーダー的な存在の方で、それに商工会の方々が、共感され、回りの人を引き込まれた様に思います。

ただ実行委員会も、いろんな難問にぶち当たることがあります。

私たち行政の立場としては、自分の仕事の部分がある反面、自分も実行委員会の一員としてまわりの中に「どっぶり」と潰かってしまうと、結構お互いの難問にぶつかってスムーズに解決していく部分がたくさんありました。

職員の出役にしても、コトナリエに関しては、監視役として出る者、それ以外の職員はボランティアの一員。

例えば今日は5人職員が手伝いに来ているけども、そのうちの1人は必ず監視役で仕事で来ている者、あとの4人はボランティアでみんなと一緒に作業に励む者という位置づけで進めます。

●聞き手 話は変わりますが、旧湖東町のことで、役場として21世紀に向けていろんなビジョンを持っておられたというような話を聞いておりますが。

●地域振興課 湖東町というのは別にこれといった素材があまりなく、ただの農村地帯の中にある、特長のない町なんです。

しかし、その当時の首長は、まちづくりに先駆

けていた方だったと思うのですが、「21世紀までにはインフラ整備をしまおう。それ以降は、人づくりの時代、ソフトの時代に入るから。」という地域ビジョンを持っておられました。

ですから、今コトナリエを開催している会場「ひばり公園」ですとか、「ハムスロイド村」や、「西堀榮三郎記念探検の殿堂」などは、そういうものの整備を他市町に先駆けて進めてこられたと思います。

平成の大合併時代を迎え、財源は大変厳しい状況となっています。その中で、現在はこのようなハード事業に手をつけられる時代ではありません。現在は、ちょうど、ソフトづくり、人づくり、そういう部分が時代とマッチしたのではないのでしょうか。

●聞き手 特長がないといわれるところから、このようならばらしいイベントを産み出した地域の「ひみつ」、「キーワード」は何でしょうか。

●地域振興課 湖東町の人は、皆さん「お人好し」という住民性を持っておられます。この「お人好し」は、悪い意味じゃありません。

つまり人が人を呼んで、さらにその人が友だちを呼んで、来てくださるのです。気が良く、他人への気配りができる方がたくさんいらつしやるんです。たくさんいい人に恵まれているんです。

●聞き手 面白い住民性ですね。

●地域振興課 「あの人に言われたら、しょうがないから行かせてもらおうわ。」「自分1人でやっても面白くないし、友達連れて行ってみようかしら。」「午前中しかあかんけど・・・かまへんの？」皆さん大変「お人好し」のありがたい人ばかりです。

多くの良い人に育まれていく「コトナリエ」。観客動員、環境面、住民性など様々な面で地域イベントお手本となって発展していくことを願っています。

●司会 滋賀県地球温暖化防止活動推進センターの2006年度を振り返ってみたいと思います。今回、センターの各地域の担当の皆さんに集まっていたいただき、主なトピックスを中心に話し合っていました。 (2007年3月26日)

出前講座について

◆湖南地域(黄グループ)担当A
2005年度の出前講座が県全体で25件であったのに対し、昨年度の出前講座は各グループとも増えてきて38件となりました。グループ毎にばらつきはあると思いますが、それぞれのグループ担当の方は、どのような感想をお持ちでしょうか。

◆大津・高島地域(青グループ)担当B
下阪本小学校出前講座について。3人の推進員さんが6年生の1クラスずつ講師を担当してくださった。本庄小学校では、伊藤推進員さんひとりで1時間講師をしていただいた。ある小学校の出前講座では、講義の後、電気を消して歩く生徒さんがいたりして、すぐ反響が出るのだなど、推進員一同喜んでいました。昨年度は一般市民向けの講義はあまりしていないので、今年度は市民に向けた出前講座が出来たらいいと思います。

◆甲賀・東近江地域(緑グループ)担当C
昨年度は各地域でのイベント啓発を含めて全域まんべんなく



西浅井町での出前講座 (7月1日)

出前講座は増えました。赤グループも永原とか西浅井のエリアが増えましたし、青グループも大津市内だけだったのが高島、マキノと新しい地域が増えましたね。

緑グループの出前講座では、近江八幡の桐原保育所に、初めて行きました。行くまでは、保育園の園児に出前講座ってどうしたらいいのか推進員さんと悩んでいました。ところが、行ってみたらびっくりで、先生が熱心だということもあって、就学前の子供たちもわかる出前講座が出来ました。これからは、幼稚園や保育所にも行けるという新たな可能性が見つけられました。いろんな層に対応できるように、教材等の充実を図っていききたいと思っています。

◆湖東・湖北地域(赤グループ)担当D
2005年度まで、ほとんどの出前講座でソーラーカーの工作をしていましたが、昨年度は、7月の西浅井と8月の彦根の2ヶ所だけでした。それ以外は、パネルを使って説明したり実験器具を使って節電などをお願いする方法が中心になってきました。また、12月高月町の時には、パワーポイントを使って話しました。それ以降の出前講座には、パネルは持参せずに必要なデータを入れたパワーポイントだけで話すようになりました。しかし、推進員十数名の地域で、出前講座が十数回と増えていくのは大きな課題だと思っています。

◆A
黄グループでは、はじめの頃は、主に継続していただいていた推進員の方に活動していただいていた

したが、お手伝いとか見学だけでもいいので、是非きてくださいね、というお声をかけていましたら、新規の推進員さんもきていただけました。後半では新規の推進員さんも前に出て、話をしていたできるようになりました。

小学校、中学校の出前講座では、いずれも、皆さん真剣に聞いていただき、後からアンケートや感想文を読んでいますと、私たちが思っていた以上のことを書かれている子どもさんもおられました。今後ますます小学校や中学校への出前講座が重要だと感じました。

映画上映会について

◆A
昨年度はセンター事業の中で、初めて映画会を行いました。12月3日の滋賀県民環境学習のついで琵琶湖博物館にて映画上映会、そして、1月8日には滋賀会館で映画上映会をさせていただきました。子どもさん向けの「アイス・エイジ2」、それからもう1つは、一般向けの「デイ・アフター・トゥモロー」を上映いたしました。思いもよらず大盛況で、博物館の映画会場が満杯になって、入れな



2006年度 滋賀県地球温暖化防止

い方もおられたほどでした。
2007年度も、地球温暖化に関する映画会を計画しております。今話題の「不都合な真実」というアカデミー賞をとられた映画ですが、そのようなものを多くの方々に見ていただけるようになればと考えています。

CO₂ダイエット買い物大作战について

◆C

もう1点、センターの主催事業ではないのですが、協力事業で10月に県内のそれぞれの地域のスーパーなどの会場で「CO₂ダイエット買い物大作战」というのをやった中で、センターでは全国地球温暖化防止活動推進センターからお借りして、「ピターラビット[®]とおんだんかのおはなし」パネル展というのをやりました。

私の担当している緑グループでは、推進員さんがこのCO₂ダイエット事業に参加することによって場慣れされ、後の出前講座がスムーズに運営できました。



びわ湖環境ビジネスメッセについて

◆D

そうですね。2006年度は、パネルを飾ってあるだけで、推進員さんの出番はありませんでした。

た。2007年度は、地球温暖化がテーマになるようなので推進員さんに大いに協力していただきたい、その会場で、「CO₂ダイエットコンテストinおうみ」の展示を見てもらったりしようと考えています。

◆D

次回は、多くの話題を提供するため1ブースだけでなく、1スペースを借りるというかたちで検討しています。



びわ湖環境ビジネスメッセでの啓発展示
(10月25日～27日)

CO₂ダイエットコンテストinおうみ 事業について

◆D

2007年度は、新しく「CO₂ダイエットコンテストinおうみ」事業というのを実施することになりました。

◆C

これは、昔、大分県の知事がやり出した一村一品事業というのがあって、その温暖化版です。

◆D

各地の温暖化対策に関して、温暖化対策と意識してやっていなくても温暖化対策になっているものも含め、クローズアップして、こんな事例がここにありますよというのを47都道府県から各々代表を出してもらおうとするものです。そして集まった事例で品評会を行い、全国に発信していこう

という、温暖化防止甲子園みたいなものです。環境省の事業で、都道府県センターは県代表を選出し、全国センターが全国大会を開催することになります。

具体的に、

滋賀県地球温暖化防止活動推進センターでは、滋賀県内の良い事例を発掘したり、もしくは手を挙げてもらったりして、12月には県代表1件を選出する予定です。



●司会 地球温暖化問題もあちこちで大きくクローズアップされる中、2007年度も、2006年度の勢いをそのままに、反省点も踏まえながら、センター活動を充実させていきたいものです。



センターでは、2007年度も記事の内容の他、様々な事業を予定しています。

★お問い合わせなど詳しいことは…
滋賀県地球温暖化防止活動推進センターまで
〔ホームページ〕
<http://www.ohmi.or.jp/ondanka/>
〔Eメール〕 ondanka@ohmi.or.jp
〔TEL〕077-524-7168 〔FAX〕077-524-7178



編／集／後／記

今冬の暖かく雪の少ない天気など、年ごとに気候変動の波がだんだん大きくなっているような気がします。地球温暖化防止は「環境無関心層」にすら浸透し、「他人事ではないな」と感じる方は多数派になったと思います。京都議定書云々はともかくとしても、地球市民全体が温暖化防止を考えないと、生活や健康に重大な影響が出るという警鐘がだんだん大きく聞こえて来ます。

原稿の募集について

機関紙「明日の淡海」では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。

- 環境問題に対する考え方や環境施策への意見・提言等
- 環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
- 美しい自然や自然保護に対する意見・提言等

※採用分には薄謝進呈

※当財団まで郵送かメールまたはFAXでお送りください。

表紙写真：コトナリエ（東近江市）

裏表紙写真：漁舟（高島市新旭町）



本誌は、環境や資源の有効活用に配慮した印刷物です